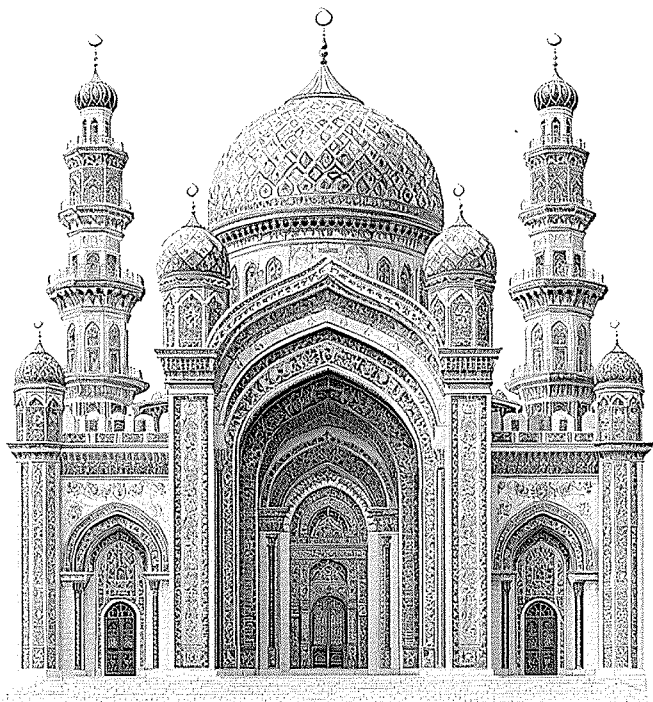


私のイスラーム観

徳増 公明



第三章

イスラームに対する誤解

まず日本におけるイスラームの事情について簡単に紹介する。

最初の日本人ムスリムは野田正太郎というジャーナリストだと言われている。1891年、彼はイスタンブールを訪問し、イスラームに出会い、その教えに魅了されてムスリムになったと言われる。もう一人同じ時代にイスタンブールを訪れムスリムになった人に山田寅次郎がいる。文献によれば、1890年トルコの船が日本の紀伊半島串本近海で沈没し、船員587名犠牲になり、69名が串本の人たちに救助された。山田寅次郎はその遺族家族に上げるため2年間に渡り日本各地から義捐金を募り、約2億円を集めた。1892年、彼は遺族に渡すためイスタンブールを訪問し、1914年まで滞在した。その間にムスリムになったようである。また1900年に有賀文八郎という実業家がボンベイへ行き、イスラームの倫理性に魅了されてムスリムになったと言われている。1909年には山岡光太郎が日本人として初めてマッカに巡礼している。1935年、神戸に、1937年東京に Masjid (モスク) が建立された。

1952年には日本人ムスリムによって日本ムスリム協会が設立された。1981年には在日外国人が主体となって運営するイスラミック・センターの建物が湾岸諸国の援助で設立された。それ以後、イスラーム諸国からのムスリムの数が増えて、現在約10万人のムスリムが日本にいる。日本人ムスリムがそのうち10%の約1万人。イスラーム団体も60近くあり、Masjid (モスク) は大小あわせて50ほど存在する。このようにイスラームは他の宗教に比べて日本においては歴史が浅い宗教である。日本の宗教は元々自然を崇拜する神道であった。538年、仏教が中国から日本に入ってきた。1549年、キリスト教がポルトガルから入ってきた。戦後、日本政府の公的な宗教教育禁止の政策があり現在の日本人は宗教に

関心を持たない人が増えた。憲法では信仰の自由を認めている。そのためか神道や仏教から派生した新興宗教も数多く生まれ、その信者も増大している。また、一神教が増えにくい環境となっている。たとえば同じ一神教のキリスト教徒の数は450年の布教活動にもかかわらず、100万人足らずで1.25億人の日本人口の1%以下である。

一方、イスラームについては日本人の多くは良い印象を持っていない。その理由として、日本でのイスラームの歴史が浅く日本国民の多くはイスラームの本質について知らないこと、正しいイスラームを伝える人が不足していること、間違ったイスラームが欧米から書物、メディアを通して伝えられたこと、イスラーム諸国での紛争やテロ事件が連日のように報道されていることが影響している。

例えばジハードについて、ジハードと言う言葉は異教徒に対して武力によって改宗を迫る聖戦と認識している日本人が多い。日本人は「コーランか剣か」（右手にクルアーン、左手に剣）と教えられてきた。最近のオサマ・ビン・ラーデンによるアメリカの同時多発テロ、サッダーム・フセインによるイラク戦争のジハード宣言は粗暴なムスリムの過激な聖戦というイメージを人々に植え付け、反イスラーム主義を勃興させる原因になっています。

日本人がイスラームについて知らないことの例として、ここに日本文部省が2007年10月に行なった調査結果がある。日本人の「中東・イスラーム観」を知るための調査で中東に滞在し、援助関係の仕事に従事しているJICAスタッフ（124名）からの回答結果である。その中でイスラームに対する印象が良くなった理由として：

1-日本ではマスコミの報道からテロ・過激派のイメージなどが強く受け、

イスラームに対する理解が低かったと思われる（イラン、エジプト、チュニジア、ドバイ、アブダビ、カタール、バハレーン）。

2－社会の秩序形成に役立ち、トラブルが少なく生きていると感じた（エジプト、チュニジア、ドバイ、アブダビ、クウェイト）。

3－イスラームの教えは慈悲深いからホスピタリティがある（アブダビ、オマーン、カタール）。

4－イスラームは他者に宗教を強制しないことがわかった（ドバイ）。

5－イスラームも他の宗教とかわらない（トルコ）。

また、イスラームに対する印象が悪くなった理由として：

1－イスラームは後進的、強制的、反合理的、差別的である（エジプト、チュニジア、サウディアラビア）。

2－ムスリムは全てを都合よくイスラームの教えに帰する。全てをアッラーのせいにする（イラン、チュニジア、ドバイ、バハレーン）。

3－ムスリムは特に女性に対する人権に対する意識が薄い。（ドバイ、サウディアラビア）

4－本当のイスラームを知らないムスリムがいる。曲がったイスラームの解釈をするムスリムがいる（トルコ、エジプト）。

5－ムスリムの間で宗教の対立がある（エジプト）。

次にメディアから見た中東・イスラーム世界について興味深いレポートがあるので抜粋して紹介する。筆者は北海学園大学の宝利尚一教授で、彼は大学に来る前に、30年余りジャーナリストとして主に中東、欧州などで取材活動を続けてきた。また中東・イスラーム問題に強い関心を持っている。彼は1972年から約5年間読売新聞社の特派員としてカイロに赴任していた。

1) 戦争・紛争・テロ・クーデターの世界

メディアから見た中東・イスラーム世界は「不安定な三日月地帯」「火薬庫」であり、戦争、紛争、テロ、クーデターが頻発する世界であった。第2次世界大戦後の中東・イスラーム世界では、戦争、紛争、テロ、クーデターが繰り返されてきた。メディアを通して中東地域の情報を得ていた日本の読者、視聴者にとって、中東・イスラーム世界は「戦争、紛争、テロ、クーデターの絶えない危険な地域」というイメージが増幅されていった。

2) 中東・イスラーム報道の転換点

第4次中東戦争は日本人にとって忘れられない戦争であった。なぜなら、アジアのはるか西に位置する中東地域で勃発した遠い戦争と思えたのが、日本が中東に石油エネルギーの90%以上を依存しているという現実には驚き、アラブとイスラエルの紛争が日本人の生活に直接影響することに初めて気づいたからである。1973年11月、日本政府は官房長官談話を発表し、アラブ支持の立場を明確にした。日本は「アラブ外交」から「アラブ外交」に転換した、と言われた。第4次中東戦争とアラブ石油戦略をきっかけに、日本メディアは初めて「アラブとは」「イスラエルとは」「中東紛争とは」「イスラーム世界とは」「ムハンマドとは」というテーマを意識して報道するようになった。それまでの日本メディアの中東・イスラーム報道は、戦争、紛争、テロ、クーデター、石油問題が中心テーマであった。1973年は日本政府だけでなく、日本メディアにとっても転機の年になった、といえる。

3) メディアに「見せない戦争」の始まり

1990年8月、サダム・フセイン政権のイラク軍がクウェイトに侵攻、占領した。そして1991年1月湾岸戦争が勃発した。湾岸戦争ではビデオゲームのような「きれいな戦争」というイメージが作られた。米軍当局による「見せない戦争」の始まりである。米軍当局は湾岸戦争の取材を極度に制限したため、大部分の記者、カメラマンは最前線での取材ができなかった。軍当局の認めた戦場の映像、戦場の取材だけが許可された。湾岸戦争は明らかにメディアの敗北に終わった。つまり、米軍当局が巧妙に情報を操作し、軍当局の撮影した戦場の映像や戦闘報告を提供すれば、世界各国のメディアはそれらを使わざるを得なくなったからである。米軍はイラク国内で起きていることに触れなかった。

4) イスラーム研究の困難性

黒田寿郎は著書『イスラームの心』で、イスラーム研究の困難性についてイスラームについての知の総量の欠如、研究伝統の欠如、情報の欠如がイスラームに対して誤ったイメージを日本人に抱かせているのではないかと、言う。また研究者のレベルで、イスラームあるいはイスラーム文化圏に関する認識は、地中海を隔てて、これと接して研究の伝統も確立されている西洋の認識に大きく依存している、と書いている。こうした指摘は日本メディアにも該当すると言える。日本メディアのジャーナリストは、日本のイスラーム研究者が「西洋の認識に大きく依存している」ように、第2次世界大戦後の中東・イスラーム世界の戦争、紛争、テロ、クーデターなどの情報を「欧米メディアの情報」にかなり依存してきたのではないだろうか。1948年の第1次中東戦争から、第4次中東戦争、アフガン戦争、

湾岸戦争、イラク戦争まで、日本の新聞・テレビ・メディアは大なり小なり、米欧メディアの情報、論調に影響されてきたと言える。日本メディアの中東専門記者と言われるジャーナリストでも、アラビア語をはじめ、中東諸国で使用されているペルシャ語、トルコ語、ヘブライ語を理解できる記者は少ないと思う。したがって必然的に中東・イスラーム世界での取材言語は英語、フランス語、ドイツ語などになる可能性がある。

5) 「9. 11」後のメディア規制

2001年9月11日の米同時爆破テロ事件、いわゆる「9. 11」事件の際、米メディアは米政権と近い立場で報道していた。米メディアに比べると、日本メディアは「9. 11」テロ報道にかなり冷静であった。また日本メディアは自社の記者、カメラマンの安全を最優先し、イラクのような危険な国での取材を避け、イラク情報を西側メディアや日本人のフリーランス・ジャーナリストに依存していたように見えた。あるフリー・ジャーナリストは「イラクの戦争は不正義の戦争である。大手メディアは攻撃する側の報道しかしない。我々は攻撃される側から報道している」と主張していた。戦争ジャーナリストが「攻撃する側」で取材するか、「攻撃される側」で取材するかで、記事の内容に大きな違いが生まれる。公正で正確な報道のためには、両側からの取材が必要であるが、戦争当事国の双方から公平に取材することは現実的に困難である。

6) 急務の中東・イスラーム専門記者の養成

欧州諸国の国民の間に中東・イスラーム諸国からの移民、外国人労働者の流入に反対する空気が広がり、また2004年3月にスペイン・マドリー

ド周辺で同時爆破テロ事件、2005年5月にはロンドンの地下鉄同時爆破テロ事件などが発生し、欧州では今、「ゼノフォビア（外国人嫌い）」から「イスラームフォビア（イスラーム嫌い）」という傾向がより強まっている。欧州各国では、文化の多様性の理解、異文化理解の必要性が強調されているが、イスラーム過激派テロに脅えているのが現実である。米欧メディアで目立つ「イスラームフォビア」やイスラーム脅威論、イスラーム過激派警戒論は、日本でも決して無縁ではない。今後の中東・イスラーム報道にとって何が必要なのであろうか。中東・イスラーム世界の現実を伝えるジャーナリストの責任は大きいといえる。イスラームへの誤解と偏見をなくすため、中東・イスラーム世界を公正、正確に伝えることのできる専門記者の養成が急務だと思う。日本メディアが中東・イスラーム世界を公正、正確に報道するためには、イスラームを正しく理解するところから始める必要がある。そのためには、中東・イスラーム世界の歴史、文化、風俗、習慣などを理解しなければならない。その手段として、英語、フランス語だけでなく、アラビア語、ペルシャ語、ウルドゥ後などの現地の言語を習得することが重要である。

では日本社会、欧米社会でイスラームが良い宗教として認められるにはどうしたらよいであろうか？それにはまず正しいイスラームを人々に知ってもらうこと、イスラームの良さを知ってもらうことだと思う。そのために国内のイスラーム団体、イスラーム研究機関が地道な活動をしている。例えば、日本ムスリム協会は50年ほど前からイスラームを学ぶために若い日本人をエジプト、サウディアラビア、シリア、カタール、UAE、マレーシア、インドネシアなど派遣した。彼らは帰国してから日本人に正しいイスラームを伝えるために、クルアーン、ハディースをはじめとしたイ

イスラームの本の出版、日本国民に正しいイスラーム伝えるためのイスラームの公開講座、シンポジウム、講演会、アラビア語講座等を行っている。しかしながら、もっとも効果的な日本国民のイスラーム理解は国民が常に接しているテレビ、新聞によるイスラームおよびイスラーム文化の紹介だと思ふ。それによりイスラームの良さを伝え、誤ったイスラーム観を是正することが期待できる。今日の社会はマスコミの力が大きな影響力を發揮している。例えば2001年のニューヨークの爆破事件はムスリムのテロ行為として報道され、日本国内でもますますイスラームが非難されるようになった。一方、それ以降イスラームに関心を持つひとが増え始め、イスラームの本が多数出版され店頭に並ぶようになった。特に若者達の中にはイスラームを学び、入信する人も増えたようである。

他の方法として、世界レベルでの宗教・文明対話がある。対話を通してイスラームの正しい姿を伝え、イスラームは戦いやテロを否定する宗教であることを強く伝えることができる。またお互いの宗教・文明に対する価値観を認識し、共通点も見出せ、お互いの信頼を得ることができるであろう。たとえば昨年7月にはサウディアラビアのアブドゥラー国王が宗教・文明間対話をマドリードで開催、世界各地から600名の宗教指導者や知識人が招待されて対話会議を行った。また同国王の提唱により、11月に国連を舞台に一神教指導者の対話会議を開催し、メッセージを発信している。